

## 短編小説論. 7 : エリアという機能

著者	赤岩 隆
雑誌名	Philologia
巻	40
ページ	5-24
発行年	2009-02-01
その他のタイトル	The study of short stories. 7
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10076/10599">http://hdl.handle.net/10076/10599</a>

# 短篇小説論(7)

## ——エリアという機能——

### The Study of Short Stories(7)

赤岩 隆

(Takashi Akaiwa)

智恵が智恵として、そっくりそのまま書き手から読み手に伝わるというのが、いわゆるエッセイの理想である。だが、前回の議論においてみたように、そうしたことは近代においては不可能になる。ほかでもない、不特定多数の読者を相手にするようになるからである。書き手と読み手双方の顔が見える時代は終わった。結果として、両者のあいだに存在した無言の信頼関係も消滅する。同時に、それとは正反対の不信が取って替わることになる。いまやどんな智恵も、容易に一片の感想へと格下げされる可能性に曝される。だが、感想や意見の提示にとどまるのでは、エッセイを書く意味がない。あるいは、不信が関係の基本である以上、ほうぼうで誤解が生じることにもなるだろう。一計を案じた書き手は、読み手とのあいだに虚構を持ち込むことになる。いうまでもなく、虚構とはもともと虚偽に類するものであり、その意味では不信や誤解の割り込む余地など最初からなかったからである。かくて、スペクテイター氏やサー・ロジャー・ド・カヴァリーといった架空の人物が生まれる。不信の無化された虚構の次元で書き手と読み手の対話が始まる。

以上が近代以降のエッセイの基本的な姿である。『スペクテイター』が露骨に試みたような政治的方法に従うか否かは別にして、書き手は不信の絶えざる圧迫に直面する。文章の枠組みに虚構を採用することにより、相対的な感想や意見とみなされる恐れのあるものを、智恵に準ずる絶対的ななかへと格上げする必要に迫られる。かくして「エリア」が誕生する。したがって、「エ

リア」とは、なにより枠組みであり機能である。不信の働きを（少なくとも一時的に）無効化し、感想や意見でしかないものが智恵を装う手助けをする。そうした偽装の手順を以下において具体的にみてゆくことにしよう。

文中に出てくる「わたし」とは、とりあえずは、エリアである。とするなら、個々の文章が積み重ねられてゆくのに従って読み手の側に集積されてゆく情報とは、まず第一に、エリアのものに違いない。エッセイというジャンルの特性上、けっきょくのところで、断片的な情報の寄せ集めにしかならないとしても、エリアとはどういう人物であるか、徐々に明らかになってゆく。とするなら、書き手と読み手のあいだに構築されるべき信頼関係とは、なにより人物としてのエリアに拠る。智恵の提供者として、どこまで信頼の置ける人物とみなせるか、それ自体にエッセイそのものの評価が従うことになる。

とはいうものの、エリアが虚構であることを確実に知っているのは、とりあえずは、作者だけである。読み手の側からは、虚構か否か俄には判別できない。虚構でもあり、実在でもある。虚構と実在を画す境界線がぼやけたままである。あるときには虚構に流れ、あるときには実在の形を取る。信頼関係の灯が点り、あるいは、消える。そうした状況のなか、読み手の側から書き手との対話を成立させようとするならば、自ら文章のなかへと身を投ずる以外にない。すなわち、不信の態度を仮に棚上げし、虚構を実在と信じるほかなくなる。とって、安心はできない。なぜなら、この信頼とは、あくまでも仮のものでしかないからである。いつなるとき不信へと逆戻りするか知れたものではない。とするなら、このあわいこそ、書き手の腕の見せ所でもある。もっと言えば、エッセイの成り立つところともなる。とって、それだけで感想が智恵に格上げされるわけではない。読み手のさらなる信頼を勝ち得なければならない。そのために書き手はいわゆる蘊蓄を傾ける。いわば智恵の保証としてそれに多くの労力を費やすことになる。以下においては、そうした機制についても詳しくみてゆくことにしよう。

のちに『エリア随筆』正篇に収められることになる一連の文章を、ラムは、「南海会社」(‘The South-Sea House’)という一文でもってはじめる。取り上げられるのは、エリアがそこに勤めていた40年まえの話である。この文章がロンドン・マガジンに載ったのは1820年の8月号だから、それから逆算すると、40年まえというのは1780年ということになる。ところが、ラムが生まれたのは1775年であり、したがって、エリアとラムの履歴とは、『エリア随筆』の冒頭から重複しないことになる。ようするに、意義深くも、すべての話は虚構によってはじめられているわけだが、いっぽう、そうだと解るのは、なにより歴史というあと知恵のおかげにほかならない。同時代の立場からするなら、了解できるのは、エリアという書き手がおそらくはそれなりに齢を取っており、かつて南海会社に勤めていたといった剥き出しの事実のみである。話はそれだけでは終わらない。というのも、ラムの履歴と照らし合わせるなら、まるまるこれが嘘の話でないことも同時に明らかになるからである。福原麟太郎の『チャールズ・ラム傳』によれば、

ラムが学校を出たのは一七八九年の十一月で、この学校で七年間教育されたことになる。まもなくペイスという人の会計事務所に入り、見習を二年たらず勤めた後、九一年秋、南海会社の小社員になった。コウルリッチは、もう二年学校にいて、その九一年、ケイムブリッジのチーズス学寮へ入る。その翌年九二年の四月五日にラムは東印度会社の会計係に任ぜられる。十七歳である。その役をそれから三十年間ラムは勤める、いわば、ついの住家はその椅子であった。(福原麟太郎著作集4、p.166)

ようするに、南海会社について書くラムには、それなりの経験の裏付けがあることになる。しかも、その経験は、東印度会社という同種の勤務を含めるなら、30年という長きにわたる。あるいは、単純に計算するなら、1792年の30年後というのは1822年に相当し、『エリア随筆』正編の出版年1823年に限りなく接近する。

そんなふうに「南海会社」（あるいは、『エリア随筆』全体）においては、虚構と経験（事実）が戯れる。その戯れが文章それ自体へと積み上がってゆく。とするなら、エッセイをめぐる問題解決の焦点も同じところにあるとみてよいただろう。あるいは、そうした戯れの様態にこそ、エッセイと短篇小说というふたつのジャンルを繋ぐ鍵がある。あるいは、様態である以上、程度の差こそあれ、『エリア随筆』のどの文章にも議論の大半は当て嵌まるはずである。とするなら、この冒頭の「南海会社」という一文の解明にまずは紙数を費やすべきだろう。くわえて、残る 27 篇のなかから適宜別の文章を重ね合わせるなら、展開される議論はより充実したものになるだろう。本稿の全体は、およそそうした形を取ることになる。

話は、イングランド銀行からの帰り道にきまってその横を通る、ある「陰気な外見の建物」に端を発する。「煉瓦と石で造られた立派な建物」である。「かつての商館」であり、「なおもなんらかの商売が続けられているものの、魂が抜けてしまったようになってすでに久しい」。「せわしない利害の中枢」であり、「商人たちの群がる場所」だったが、いまはひっそりと静まりかえっている。これこそは、「かの有名な南海泡沫事件」により破産した南海会社の成れの果てである。

語り手は、自身がそこに勤めていた 40 年まえの話をする。同僚だった事務員たちの話である。出納係のエヴァンズ、その下役のトーマス・ティム、会計係のジョン・ティップ、文人でもあるヘンリー・マン、名家の血を引くおしゃべり屋のブラマー、歌の巧みな M 某、裁判好きのウーレット、勿体ぶったヘップワース、等々。いずれもひと癖もふた癖もある人物たちだが、彼らが実在の人物か否か、とりあえずは判断のしようがない。したがって、読書をより十全にまっとうしようとするならば、読み手は仮にそうだと信じざるを得なくなる。そのうえで、どの程度本当らしい人物として描かれているか、蓋然性を推し量る。その結果が文章全体の信頼度の基礎となる。

書き手と読み手のあいだの対話の実質とは、そうしたものである。蓋然性の

推量という形を取りながら、虚構の次元、あるいは、虚構と経験（事実）のあいにおいて行われる。たとえば、上記の人物のうち最初に挙げられている出納係のエヴァンズについてはどうだろうか。たかだか 20 数行の文章である。それを支配しているのは、『エリア随筆』全体にも指摘できるユーモアであり、その結果として立ち上がってくるのは、どれも多分に誇張された人物像であるが、狭いスペースのなかで本当らしさをどうにかしようとするなら、ユーモアという手法は数少ない有効な手段のひとつとなり得る。曰く、エヴァンズというのは、「午前中は去勢した雄猫よろしく陰鬱に勘定台にむかっているが」、「午後 2 時になってアンダートン亭で仔牛の首の焼き肉をまえにする段になるとその陰鬱な表情も少しは晴れる」。だが、真に本領を発揮するのは、「夕方のお茶と訪問の時間になってから」である。

時計が午後 6 時を打つのと同時に聞こえてくる耳馴れたドアを叩く音。この音こそは、愛すべき老独身者が姿をみせる合図であり、その喜びを受ける家族にとって変わることはない話題となる。それからが彼の本領、栄光の時間となる。マフィンを手に、なんとも打ち解けた様子でおしゃべりに興ずることか。人知れぬ歴史を詳しく物語ることか。(Elia, p.4)

エヴァンズというのはそういう男である。勤務後豹変するのはなにもエヴァンズだけではないだろうが、それにしても極端な叙述である。一般にこの種の極端さは現実味を欠くものとして受け取られるだろうが、どいつて、エヴァンズという人物の実在性まで奪われてしまうわけではない。なぜなら、責任はエヴァンズその人ではなく叙述の主の側にあるとも考えられるからである。つまり、ほかでもないエリアにだが、結果として、この一種の責任転嫁により、逆説的にエヴァンズの人物としての真実味は増す。すなわち、誇張を減殺するなら、その真実の姿が露わになるだろうと。

同様のことは、エヴァンズと同僚らについても当て嵌まる。とはいっても、それだからといって、叙述の主であるエリアの信頼性が損なわれるわけ

ではない。なぜなら、単純にも、ここでの信頼性とは、そうしたものに拠ってはいないからである。ようするに、叙述において誇張に耽るからといって、智恵の提供者として不相応とはみなされない。もっと言えば、智恵の提供者としての信頼性と叙述のスタイルとは無関係である。それよりは、たとえばエヴァンズという人物を真にエリアが知って話をしているかどうか、それが鍵となる。とするなら、評価されるべきは、スタイルよりは叙述の内容、あるいは、内容的な密度である。

そこで話題にしなければならないのが、先に触れたいいわゆる蘊蓄であるが、その点、エリアに抜かりはない。南海会社、あるいは、その建物の内部について、じつに細々とした書き込みがなされている。冒頭に続く 2 頁ほどの文章がそれであるが、その密度は濃く、じっさい、引用しようとする、候補が多すぎて選択に困ってしまうほどである。たとえば、次のような文章がそうである。

櫛の壁板に掛かっているのは、アン女王時代の今は亡き総裁、副総裁の肖像画、ハノーヴァー王朝の最初のふたりの国王の肖像——それと、その後の発見により今や時代遅れとなった馬鹿でかい海図——夢同然にぼやけたメキシコの地図——パナマ湾の水深測量図である——長い廊下の壁にはバケツが列を成してのんびりとぶら下がっているが、その壁の造りときたら、この世の終わりの大火事ならいざ知らず、どんな火事をもものともしないといった代物である——建物全体に渡る地下室の広大な連なりには、かつてはスペインの金貨や銀貨が「日の目も見ずにうずたかく」積まれていた。富の神マモンがその孤独な心を慰められるようにである——だが、それらも遠い昔に使い尽くされてしまった。かの有名な南海泡沫事件の泡の破裂とともにちりちりになってしまった。(Ibid., pp.1-2)

時代遅れの元帳や取引日記帳を食らい肥え太っていたかつての紙魚どもの破壊活動は止んだが、別の軽い破壊があとを引き継ぎ、単式記帳と複式

記帳のあいだに巧みな雷文模様を描く。層を成す古い埃のうえに（埃の過受胎とでも云うべきか）埃が積み重なっているが、それをかき乱す者といえ、アン女王時代の簿記法を調べようと興味を持つ物好きか、さもなければ、それほど清らかな動機からではなく、あの途方もないインチキの謎の幾ばくかを解こうとする者の指くらのものである。(Ibid., p.2)

深い尊敬の念を抱きつつ、巨大ながらんとした部屋や中庭を夕暮れに漫ろ歩く。どこをむいても過去を物語るものばかりである——死んだ会計係の亡霊が、幻のペンを耳に挟み、生前同様まじめ臭さつて傍らを行き過ぎる。現実の会計や会計士はどうも苦手だ。計算がからきしだめなのである。それに引き替え、今や不要となった巨大な古帳簿はどうだろう。今時の退化した事務員の力では、3人掛かりでもそれが鎮座まします棚から下ろせそうもない——昔流の一風変わった飾りに被われ、装飾的な赤線の罫が縦横に走っている——形式的に余分なゼロを付け足した総計が3項に並ぶ——冒頭には敬虔な文句。それなしでは、信仰に篤い先祖たちは、帳簿や積荷帳すら開ける気にならないとでも云うようだ——高価な仔牛革の表紙をみれば、立派な図書室に入ったような気にもなる——まさに心地よくためになる偉観と云える。(Ibid., pp.2-3)

そんなふうにして叙述の主としてのエリアの信頼性は支えられる。当事者でしか得られないと思われるような叙述の詳細さがそれを保証するわけだが、こうした機制は、諧謔的なスタイルとは関係なく、もちろん人物の信憑性についても働く。かくてエリアは智恵の提供者としての資格を獲得してゆく。とはいうものの、それらの信頼性や資格は、けっして絶対的なものではない。叙述の詳細について、読み手の側から実地に確認できない以上はそうである。とするなら、エリアの信頼性とはあくまでも仮のものでしかない。もっと言えば、たかが偽装でしかないのだが、書き手とすれば、そうした危うさをぎりぎり保持しながら、先へと進む以外道はない。当然のことながら、書き手



はそのことを十二分に意識している。それが証拠に、「南海会社」という文章は、意義深くも次のように終わっている。

読者のみなさん、この文章において、もしもわたしがあなたがたを終始弄んでいたとしたら、どうしますか——ことによると、わたしがあなたがたのまえに呼び出したいろんな名前とは、じつは架空のもの——実体のないものかも知れないのです——それこそ、ヘンリー・ピムパネルやギリシアのジョン・ナップ老のようにです。

いずれにしろ、それらの名前に相応するような人物が実在したと考へ、納得していただくほかありません。重要なのは、どれも過ぎ去った昔の人たちだということなのですから。(Ibid., p.8)

本稿の論旨からすれば、当然といえば当然の意識であるが、これをみれば、エリアがどの辺りに自身の文章を成り立たせようとしているか、手に取るように解るだろう。すなわち、先に指摘した虚構と経験(事実)、信と不信のあいまいということなのだが、それだからこそ、初っ端の「南海会社」を終えるにあたり、もっとも際どい点を自ら問題化せざるを得なかった。書き手にすれば、敢えて攻勢に出たわけだが、この問題含みのあわいをもしも読み手と積極的に共有できるなら、あとの展開は楽になる。あるいは、そうできてこそ、続く文章を繋げてゆくことができるだろう。それが証拠に、折をみて、認識が然るべく共有されているかどうか確認が行われる。具体的には、2番め、3番めの「休暇中のオックスフォード」及び「35年まえのクライスツ・ホスピタル」、14番め、15番めの「我が親類縁者」及び「ハートフォードシャーのマックレー・エンド」、あるいは、20番めの「夢の子供たち」等々の文章においてであるが、それらにおいて、エリアは自身の正体というもっともデリケートな部分へと故意に手を伸ばす。文章中のあらゆる詳細が、じつは同様の微妙さを基盤にしていることに繰り返し注意を喚起し、そうすることで認識の共有状態を執拗に更新する。書かれる文章がそうした条件下においての

み成立するものとしたら、ぜひとも必要な作業には違いない。それでこそ、書かれる文章の、いわゆる内容が読み手の側に受け入れられるのだろうし、あるいは、それでこそ、書かれる文章が一篇のエッセイともなり得る。残る問題は内容それ自体ということになるのだろうが、次にそれについてみてゆくことにしよう。提示されるものがたんなる感想や意見にとどまっていないかどうか確かめようとするならば、誰しも即座に思いつくように、内容こそはなにより目をむけて然るべきものには違いないからである。

とはいうものの、幸いにもと云うべきか、答えの要点については上記引用においてすでにエリア自身によって触れられている。すなわち、「重要なのは、どれも過ぎ去った昔の人たちだということなのですから」という一文においてであるが、これが示すとおり、いわゆる過去こそ一貫したエリアのテーマである。じっさい、「南海会社」にはじまり「マンデンの演技について」で終わる『エリア随筆』正篇全体を貫く主調音とみなしてよい。したがって、内容的な同意を読み手の側から首尾よく取り付けるには、「過ぎ去った昔」に視線をむけるという行為そのものが好まれるかどうか、なによりそれが分かれ目となるだろう。好まれないとするなら、『エリア随筆』において、感想や意見が智慧に格上げされることはない。じつに危ういものだが、これがエッセイというものの正体であり、エッセイと短篇小説（フィクション）というものの相違でもある。感想や意見（あるいは、格上げされた智慧）といえども、エッセイにおいては、真の虚構（フィクション）とは一線を違える。短篇小説とは異なり、虚構から智慧が生じることはないからである。エッセイにおいては、虚構とはあくまでも伝達のための方便であり、智慧（格上げされることになる感想や意見）は虚構よりもまえに準備されている。もつとえば、智慧の準備に従って、虚構の準備がなされる。虚構は智慧に徹底して従属するわけだが、その様子をこれからみてゆこう。

『エリア随筆』冒頭の「南海会社」が、40年まえの話に基づいているのはたまたまではなかった。『エリア随筆』を読み進めてゆけば、不ずと気づくこと

である。5番めの「大晦日」には、エリア自ら次のように書いている。

わたしは生来目新しいものといえ、早手回しに尻込みする傾向がある——本でも人の顔でも新しい年でもそうだ——精神的に歪んでいるからだろう、先のことにもまっすぐ目をむけるのに難儀する。もはや将来にむかって希望を持つことはほとんどない。元気になるのは、逆の方向（過去）に顔をむけたときのみである。過ぎ去ってしまった幻や終わってしまったことにわたしは没入する。むこうみずにも、過去の失望と対決する。かつての落胆が相手なら、わたしは鎧で身を固めたも同然である。旧敵を空想のうちに許し、あるいは、打ち負かす。かつて酷い目に遭った賭け事を、ばくち打ちの言葉を借りれば、「好き」という一念から再度やり直してみたりもする。人生のどんな不運な出来事も事件も、わたしはもはやひっくり返したいとは思わない。わたしにすれば、それらはみごとに作り上げられた小説のなかの出来事も同然だからである。(Ibid., p.32)

人からの共感が得られないほどにわたしは回顧に耽るのが好きである。なにかしら病的な性格を示しているのかも知れないが、別の原因が考えられないわけでもない。ただ単純に、妻も家族もないという理由で、自己を投影するのに自分自身しか相手がいなくてというだけのことなのかも知れない。戯れる子どもがいないがゆえに、記憶のなかへと引き返し、過去の想いを、自身の跡継ぎやお気に入りよろしく養子にするような真似に耽るのだろうか。読者のみなさん、もしもこうした考え方が奇怪にみえるなら（いずれにしろ、みなさんはお忙しい方々でしょうから）——もしもどんな共感も得られず、ただ奇妙に気取っているだけと聞こえるなら、それこそ嘲笑の届かないところに引き下がるしかありません、エリアという幻の雲のなかに隠れる以外ないでしょう。(Ibid., p.33)

エリアとはそうした人物である。あるいは、エリアという人物の本質を指す

ものとはこれである。じっさい、数々の文章にちりばめられたエリアをめぐる情報の総体も、これに比べれば、およそ外面的なものにすぎないとも云える。とするなら、そこから紡ぎ出される内容（智慧）の像も、そうした人物（本質）の像に添うことになるだろう。すなわち、ひたすら過去にむけられる視線にであるが、事実、そのように考えるならば、『エリア随筆』に収められたレトリカルで読み難い文章にも、意外とすんなりと接近できることが解るだろう。どんな込み入った文飾も、過去にむけられた視線に沿って、迷うことなく解いてゆけばよいだけのことなのだから、苦勞はない。だが、はたして読み手はそのように構成された視線を思惑どおり受け入れるだろうか。先に指摘したとおり、議論はそこへと収束する。これを解決するには、エリアが生きた時代について若干ふり返ってみる必要があるだろう。

エリアの視野に入っている時代とは、18世紀の後半から19世紀のはじめにかけてである。もっといえば、「南海会社」にあるとおり、40年まえの1780年くらいから執筆時点の1820年くらいまでである。産業革命が着実に進行し、いわゆる重商主義が末期を迎えつつあった。重商主義はすぐにも帝国主義に取って代わられる。その象徴のように、都市の労働者が着実に産み出され、しばらくすると不要となった奴隷が解放されることになるだろう。時代は加速度的に推移し、新旧の交替は激しさを増しながら進行してゆく。古いものが次々と姿を消していった時代である。だとしたら、エリアの後ろむきの視線にも意味はある。とって、必ずしも、失われつつある昔を懐かしむといったネガティブな意味ではない。なにより変化の速さがその種の悠長さを許さないだろう。執拗に過去にむけられる視線とそれにより文章化される肯定的な言説のふたつは、笑いを誘うような表面とは裏腹に、否応もなく確信的な抗議とならざるを得ないだろう。時代はたしかに変わってゆく。それを止めることは誰にもできない。だが、それだからこそ、それでほんとうによいのかと筆を執らざるを得なくなる。『エリア随筆』とはそのようにして編み出されたものである。『エリア随筆』が読み手に対し真摯に応答を求める論点とはそれである。とするなら、意外にも『エリア随筆』は、『スペクテイター』

に負けず劣らず、政治的な実体を備えていると云ってよい。そのイデオロギーの有り様は、エリアの弱腰の外観からすれば不釣り合いと思えるほど先鋭的である。やがてはそこからマルクスやカーライルといった諸々の社会主義的な運動も生まれてくることになるだろう。

そうした『エリア随筆』の読み方、あるいは、エリアという機能の解釈が正しいとするならば、読み手の側に突きつけられた選択、すなわち、『エリア随筆』に収められた文章を内容的に承認するか否かの選択は、きわめて重大な政治的=社会的な意味合いを持つことになる。大袈裟に云うなら、ときには投票行動にも匹敵する重要性を担う場合もあるだろう。しかしながら、それでこそ、『エリア随筆』の個々の言説は、感想や意見の次元を脱し智恵へと格上げされる。書かれる文章は、望みどおり、エッセイの名に値するものとなる。たとえば、「首都における乞食の衰微を嘆ず」という一文が『エリア随筆』正篇の最後のほうに載っている。タイトルにある「乞食の衰微」とは、首都からの乞食の一扫のことである。それを促すのは「社会改革の箒」にはほかならないが、「嘆ず」の一語が明白に示すとおり、書き手はそうした新傾向を好ましいものとは思っていない。そうした考え方に同調するか否か、読み手は具体的に決断を迫られるわけだが、感想や意見が智恵へと格上げされる場面とはこれである。『エリア随筆』がエッセイとなる瞬間である。要求に応えるべく、(とりあえずは真剣に)読み手はエリアの言葉に耳を傾ける。そして、先に指摘した密度の濃い蘊蓄と出会う。この場合は、ヘラクレスの棍棒に十字軍、ディオニュシオスにヴァン・ダイク、ペリサリオスに伝説の盲目の詩人、騎士物語にシェイクスピア、聖書外典「トビト書」にヴィンセント・ボーン、ゴードンの暴動にエルギン・マーブル、『トリストラム・シャンディ』にバンク・オブ・イングランド、等々である。乞食撲滅の動きに異議を唱えるのに、以上をめぐる蘊蓄が動員され、都市(首都)における物乞いの必要性が諄々と説かれる。

もっとも古くから存在し名誉ある貧困の形態とは彼らである。その乞う

ところは、人間共通の心情に対するものであり・・・しゃくに障ることのない唯一の賦課、出し渋りされることのない唯一の査定である。

彼らには惨めさの深みから発する威厳が備わっている。裸でいるほうが、お仕着せで暮らすよりも人間の本質にずっと近いことを彼らは教えてくれる。(Ibid., pp.130-131)

物語であれ歴史であれ、乞食は王の真反対のものとして存在する。詩人であれ(親愛なるマーガレット・ニューキャッスルの言葉を借りれば)騎士物語の作者であれ、運命の逆転をもっともくつきりと感情込めて描こうとするなら、襦袢と合切袋の地点に主人公を貶めるまでペンを執る手を止めようとしないうら・・・宮殿から放り出されたリア王は、「まったき自然」に適うまで衣服を棄てなければならない。王子の愛を失ったクレセードは、美しさとは無縁の蒼白い腕を伸ばして、施しを乞わねばならない。鈴と物乞いの鉢を手に癩者の施しを乞わねばならない。(Ibid., p.131)

襦袢は貧乏の不面目とするところだが、乞食にすればそれが式服であり、商売上の、あるいは、終身在職権を表す優美な記章、正装であり、公衆のまえに現れるときには身に帯びていることを期待される衣装にほかならない。乞食が流行から外れることはけっしてなく、びっこを引きながらそのあとを追うこともない・・・外見に気を配る必要がないのは、世界広しいえども、唯一乞食だけである。世の浮き沈みとも関係なく・・・株や土地の価格の影響を受けることもない・・・誰の保釈保証人になることも期待されず、宗教や政治のことで面倒な質問攻めに遭うこともない。乞食こそはこの世で唯一自由な人間なのである。(Ibid., p.132)

諸々の蘊蓄が動員されるのは、乞食の問題がただ単に乞食の問題にとどまるものではないからである。効率的な塵芥処理とはわけが違う。なるほど、塵芥同然に始末しようと思えば、やっでできないことはない。ただし、結果

は、ただ街がきれいになるということだけでは済まされない。乞食の一扫とともに消え去る大事なものがあるからである。ある種の空虚があとに残される。それを問題視しなければならない。あるいは、そこまで事を見据えて乞食の問題を考えるべきだとエリアは云いたいわけだが、上記引用が示すとおり、その云い分によれば、乞食という存在は人間の本質までまっすぐに通じている。すなわち、乞食の否定とは、そうした大事なものの否定にほかならない。はたしてそれでよいのか。読み手はそのように問われているわけである。

エリアにとっての過去とは、あるいは、過去にむけられる執拗な視線やそれに由来する蘊蓄とは、ただの懐旧趣味からはほど遠く、きわめて同時代的な意義を担うべきものである。ゆきつくところ、読み手が下す判断とは、そうした深みを持ったなにかに対するものである。その行為は、「乞食の衰微」の一文が示すとおり、すぐれて政治的な、あるいは、社会的な意味合いを伴う判断にならざるを得ないが、その行為の過程において、『エリア随筆』はエッセイとなってゆく。それへと格上げされてゆく。なるほど、個々の主張に対する同意がそれで得られるかどうかは定かでない。ではあるものの、突きつけられている文章が、ただの感想や意見の提示に終わるものでないことは納得されるはずである。たとえ読み手が極端にも、『エリア随筆』全篇を内容的に否定するとしてもそうである。

かくて、もとを質せば感想や意見でしかないものが智恵化される。智恵へと偽装される。エリアは、自身の主張の本来的なしなさを身にしみて熟知している。その結果が『エリア随筆』独特の自己卑下的な口調であり、とかく諧謔で誤魔化すようなスタイルともなるわけだが、うえてみたように、それにより覆い隠された核心部分は強固としたものである。一瞥しただけでは容易に窺い知れないものだとしても、その働きにより感想や意見は智恵となる。言葉を換えれば、そうした働きこそエリアという機能にほかならないのだが、この機能にはあとひとつの半面が残されている。すなわち、虚構全般、とりわけ短篇小説との関係である。

先に述べたように、虚構は智慧に徹底して従属する。エッセイを志向する以上致し方のないことであるが、逆を返せば、そうした志向から自由になるなら、エッセイは虚構全般へと開かれるということである。虚構を採り入れざるを得ない近代以降のエッセイという観点に立つならば、なおさらである。ようは、むしろ積極的に虚構と経験（事実）とをエリアという機能の場で戯れさせてみればよい。そこから新たな登場人物が生まれ、出来事や事件が生じ、物語が形成される。結果は、短いというエッセイの物理的制約に添う恰好で、必然的に短篇小説へと結実するだろう。いうまでもなく、それはもはやどんな智慧とも無縁である。そもそも虚構はその種の固定化したものには馴染まないからである。だが、それゆえにこそ得られるものがある。それとは、ほかでもない娯楽であるが、娯楽とは、本来的に感想や意見の住まう世界の住人である。したがって、本稿の論旨からすれば、エッセイ以前の問題ということになるのだが、同時に本稿においてはそれを短篇小説とはなにかという問いの、とりあえずの応えとしておきたい。そのうえで残る作業を進めたいと思う。すなわち、可能性の次元において『エリア随筆』をエッセイ以前のものとして味読する。それを通じて、エッセイ全般を短篇小説全般へと開いてみたい。最初から物語のための物語として構築されたわけではない、すなわち、虚構のための虚構でない出自を持つ短篇小説の有り様というものを最後に考えてみよう。

じっさい、『エリア随筆』正篇には、そうした思いつきに見合う文章が目白押しに並んでいる。ためしに目次に目をむければ、視線だけは一様に過去へとむけられているけれども、その内容においては、じつに頼もしく変化に富んでいることが解るだろう。事実、その頼もしさをまえにして、これこそはと適例を選ぶのが困難なほどである。そしてまた、こうした事情とは、『エリア随筆』の変わらぬ人気の秘密の一端とも重なるのだろうが、そんななか、たとえば「夢の子供たち」と題された一文がある。あるいは、それに続く、「遠い文通」や「煙突掃除夫を讃う」といった素敵な文章がある。



「夢の子供たち」の内容は、父親（エリア）がふたりの子ども（アリスとジョン）にむかって、話をして聞かせるというものである。とほいうものの、それ以前の文章においてすでに明示されているように、エリアは独身者である。ゆえに、この文章には「夢想」の副題が付いている。「ふと目醒めると、独身者の肘掛け椅子に静かに腰を下ろしていた」と一文の末尾にあるように、すべては夢だったというわけなのだが、そうした造りが示すとおり、「夢の子供たち」は、エッセイ以前という分類にきわめて近いものである。もちろん、そこに智恵化のメカニズムが働いていないわけではない。というのも、「夢の子供たち」とは、思い出（過去）に纏わるお話をするという形を取りながら、死という話題についてごく生真面目に考察したものだからである。とあって、どんな硬い主張がなされているわけでもない。それが証拠に、最後には、智恵と感想（意見）のあわいに「夢想」よろしく文章そのものが溶けてゆく。

ふとアリスのほうをむくと、[いまは亡き] 母親アリスの霊がまざまざとその目許に現れ出たかのように、自分のまえにいるのがどちらなのか、その美しい髪の毛が誰のものなのか定かでなくなってきた。じっとみつめているうちに、ふたりの子どもたちは徐々に視界からぼやけだし、遠ざかってゆく。そしてついには、遙か彼方にふたつの悲しげな顔がみえるだけになった。すると、奇妙にも声なき声が聞こえてきて、こう云う。「わたしたちは、アリスの子どもでもあなたの子でもない。そもそも子どもですらないのです。アリスの子どもたちの父親はバートラムといいます。わたしたちは何者でもない。無以下の存在、夢なのです。わたしたちは、そうになっていたかも知れない存在にすぎない。わたしたちがこの世に生を受け、名前を得るには、何百万年ものあいだ退屈な忘却の川の岸辺で待ち続けなければならないのです。(Ibid., p.118)

「忘却の川」とは、黄泉の国に流れる川である。その岸辺で待ち続けなければならないふたりの子どもたち。一連の文章が最終的にゆきついた先のイメ

一ジがこれである。智恵と云うにはほど遠いぼやけた輪郭を提示しただけで一文は終えられるわけだが、それにしても、この幻想は想像力に富んでいる。しかも、続く先の引用の目醒めのシーンのあとには、次の一行が最後の最後に添えられている。「傍らには忠実なブリジェットが変わらずにいる——だが、ジョン・L（すなわち、ジェームズ・エリア）は永遠に帰ってこない」と。このふたりは、「わが縁者」および「ハーフォードシャのマックリー・エンド」等において詳しく紹介されているエリアの仲のよいふたりのいとこであるが、通常は、それぞれラム自身の兄ジョンと姉メアリーを色濃く投影した人物とされている。すなわち、本稿において先に問題化したところの、エリアとは誰かという『エリア随筆』の抱えるもっともデリケートな部分で、ここでの幻想を受け止めようとするわけである。幻想を幻想のまま放置するのではなく、それを受け止め、形を与える。エッセイ以前という分類が必ずしもエッセイ以下ではない所以であるが、それだからこそ、「夢の子供たち」という文章は、未知の分野を覗かせることが可能となる。すなわち、ブリジェットやジョン・Lをより積極的に虚構化するならば、逆説的により深い別種のリアリティを取得することもまた可能であるといった見通しが開けてくる。

うえて「夢の子供たち」と並べて名前を挙げたもうふたつの文章、すなわち、「遠い文通」と「煙突掃除夫を讀う」のふたつについても、エッセイ以前という状態をフィクション（短篇小説）にむけての展望として読み解くことは可能である。「遠い文通」は、タイトルの示すとおり、手紙の体裁を取っている。宛先は、シドニーに住む友人 B・F となっている。福原麟太郎によれば、B・F とはバロン・フィールドという実在の人物であり、それにむけて送られた実際の手紙がこの「遠い文通」という文章の正体だと云うのだが、だとするならば、この文章は、二重の意味で短篇小説に近いことになる。ひとつには、周知のように、手紙の体裁というものが、すでに 18 世紀以来小説の形式として馴染み深いものとなっているという意味において。またひとつには、上記ブリジェットやジョン・L 同様、ここでも B・F（あるいは、手紙の書き手であるエリア）が、虚構と経験（事実）が構成するあわいという際どさの

うえに立つという意味においてである。ようするに、読みようによっては、「遠い文通」という一文は、それらの成り立ちを通して、すでにエッセイ以前の領域からフィクションの次元へと抜け出ていると取れないこともない。とりわけ、第一の意味においてはそうである。文学的な形式の定着という引力が、「遠い文通」をフィクションの側へと強く引き寄せるのである。

のこる「煙突掃除夫を讃う」という文章も、別様のやりかたで読み手を魅了する。

煙突掃除夫をみかけるとわくわくする——といって、ご理解頂きたいのですが——大人の煙突掃除夫ではない——齢を食った煙突掃除夫では魅力に欠ける——そうではなくて、母親にいくら洗ってもらっても完全には消すことのできないあの煤で黒くなりかけた年端もゆかぬ新米、いわば花咲くころの新米がよい——夜明けとともに、あるいは、それよりも早くに起き出して、若い雀のピーチク・パーチクという轉りよろしく、かわいい商売の呼び声を上げるあの者たちである。ときには日の出に先駆け宙高く昇ってゆくのをみるならば、まさにその呼び声は朝の雲雀にも比すべきものである。

そうしたばやけた斑点——哀れなしみ——無邪気な黒い姿に、わたしは心からの思慕を寄せる。(Ibid., p.124)

「煙突掃除夫を讃う」という一文は、そんなふう書き出されている。素晴らしい書き出しであるが、じっさい、この文章の全体にはじつに多くの価値あるものが含まれている。煙突掃除夫をめぐる微細な描写もあれば、ぶ厚い蘊蓄も惜しみなく披露される。くわえて、豊富な経験や鋭い観察眼をも随所で示すといった具合で、読み手を先へ先へと誘って止まない。まさしく一級品と呼んで差し支えのない文章なのだが、といって、これが智恵へと結晶化されることは最後までない。多くは感想や意見、つまり、エッセイ以前のままである。だが、だからといって、読み手が不満を覚えることはない。その

ようにしてこの文章は、それ自体として未知の領域へと一步を踏み出している。その種の領域の新しい魅力を優先させ、古い形のエッセイ＝智恵という伝統的な価値を棄てたと云ってもよい。この試みが如何ほど短篇小説のそれに近いか判断することは、すぐには困難だが、歴史をふり返ってみるならば、そうした智恵の結実という成果を故意に求めない描写や蘊蓄（あるいは、豊富な経験や鋭い観察眼）は、短篇小説の有り様のひとつとして、すぐにも採用されることになる。物語のための物語、虚構のための虚構というやりかたに出自を持たぬ短い文章が、かくて誕生する。といて、「煙突掃除夫を讚う」という文章が、『エリア随筆』に含まれることに意味がないわけではない。それどころか、近代的なエッセイの構築を目論むエリアによってそれが産み出されたからこそ意味がある。「遠い文通」にしる「夢の子供たち」にしる、あるいは、「南海会社」にしる、『エリア随筆』に収められたすべての文章は、その仲間である。類似的存在物である。だとするなら、「煙突掃除夫を讚う」を読むことは、それらを読むことに通じている。存在の核心部分において相互に通じている。その意味では、同じ読書なのであり、そのようなものとみなされることを要求しているのである。

本稿における議論をみれば解るように、『エリア随筆』という作品は、人口に膾炙しているのとは反対に、難解な問題を幾つも含んだ作品である。その最たる理由は、ほかでもない、『エリア随筆』が、エッセイと短篇小説というふたつのジャンルの狭間に位置しているからである。その種の作品は少なくとも、きまって『エリア随筆』同様、難解な問題を含んだ作品になることは（あるいは、あわせてその種の作品がきわめて魅力的な作品になることも）、文学史が明らかに証明するところである。本稿によってそうした謎や魅力が説明し切れたとは云えそうもないが、不足を承知のうえであえて先へと進みたいと思う。次は、ディケンズの『ボズのスケッチ集』である。

#### 【参考文献】

Charles Lamb, *Elia and the Last Essays of Elia*(Oxford: The World's Classics)

チャールズ・ラム『エリアのエッセイ』（船木裕訳、平凡社ライブラリー）

福原麟太郎『福原麟太郎著作集』第4巻（研究社）